

熟達保育者による「気になる子ども」の認識と支援プロセス

Assessments and supporting process to anxious children
by a childcare expert

杉山 成史

松尾 剛

杉村 智子

Narufumi SUGIYAMA

Go MATSUO

Tomoko SUGIMURA

(下富野保育所)

(福岡教育大学教育学部)

(福岡教育大学教育学部)

(平成27年9月17日受理)

本研究の目的は、「気になる」子どもに対する熟達保育者の認識の仕方や関わり方の特徴を明らかにすることであった。幼稚園の3歳児クラスを対象として、第1筆者が保育サポーターとして保育に関わりながら、そのクラスを担当する熟達保育者の保育を観察した。また、毎回の保育の後のインタビューや、質問紙を用いた調査をあわせて実施することで、熟達保育者が子どもに関わる際の行動だけでなく、その行動の背景にある子どもの理解の仕方や、関わり方の判断、調整の過程について検討した。インタビューにおける保育者の語りを定量的、定性的に分析した結果、「気になる」子どもと関わる際の認識の特徴として、その子どもの過去と現在の統合、多様な場面における行動の統合、子ども自身の視点と保育者の視点の統合、といったように、多様な情報を統合しながら子どもを理解し、関わり方を調整していることが明らかになった。また、過去、現在、未来という長期的な時間軸の中で、今、ここで起きている出来事を理解し、子どもにとっての意味や価値を見いだしているという特徴も示された。

キーワード: 「気になる」子ども, 保育実践, 熟達化

問題と目的

近年、保育の現場では知的側面に著明な遅れは認められないにも関わらず、保育者が「気になる」という子どもが年々増加している(本郷, 2007)。「気になる」子どもとは、保育者からみて、「落ち着きがない」「感情を上手くコントロールできない」「他児とのトラブルが多い」等の特徴を持つ子どもである(本郷, 2007; 増田, 2013)。また、学習障害、注意欠陥多動障害、高機能自閉症などのいわゆる軽度の発達障害や軽度の知的障害の特徴を持っているが、診断が不明であったりする子どもであるということも言われている(無藤, 2005)。

しかし、この「気になる」子どもという用語は概念的・操作的定義が確定された専門語ではなく、保育士の視点から保育に困難さを感じる子ど

もという漠然とした用語である(藤井ら, 2010)。つまり、研究者によって様々な概念付けがされており曖昧な用語であるとともに、個々の保育者の「気になる」子どもの認識には幅があり、客観性や信頼性にも差があるとされている(今中, 2013)。郷間(2008)は、保育所および幼稚園の保育士と教諭217人を対象に、保育者の感じる困難さや困り感について、障害児と「気になる子」との比較を行なっている。「気になる子」に対する指導上の問題として「診断を受けていないので、具体的な対応方法がわからない」、「自分の判断に任せられ、どう対応していいか迷う」、「年齢とともに改善する可能性もあるので、どの年齢で診断を受ければいいのかわからない」などの回答が得られ、「気になる子」に関わる保育者が、子どもへの対応や支援の方法にとまどいを感じていることが示された。

このような状況にあって、「気になる」子どもへの関わり方の方向性などが保育者間で必ずしも十分に共有されているわけではない。例えば、経験豊かな保育者であれば、そのような子どもに対して「いずれできるようになる」といった姿勢で、適切な距離をとりながら関わることもできるかもしれないが、新任保育者は保育の経験が少ないため、学生時代や研修の際に得た障害児に関する知識を目の前の気になる子どもに対して当てはめてしまい、不必要な関わりをしてしまうといった事態も生じうる。「気になる」子どものすべてを安易に発達障害に結びつけてしまう危険性も指摘されており（柴崎, 2009; 古市, 2009）、普通保育や障害の診断のおりた障害児の保育に加え、大変曖昧な所に位置づけられている「気になる」子どもの保育について体系的な研究を行なうことが必要であると言えよう。そこで、本研究では、新任保育者との比較などを通じて、熟達保育者の関わり方の背後にある様々な認知過程（子どもの捉え方や、行動の解釈の仕方、適切な関わり方の判断など）の特徴を明らかにする。

「気になる」子どもを担当している新任保育者に対してインタビュー調査を行なった小川(2010)は、新任保育者が「気になる」子どもに対して関わる際に経験する困難として「言葉」「生活習慣」「友達関係」「親との関係」などの点を明らかにした。具体的には、「保育者の話の内容を理解できない」や「1対1ではできるが他児よりも時間がかかり、そばについていないとできない」といったものである。新任保育者は「気になる子ども」の行動面、生活面、社会面、情緒面への悩みが大きく、対応に苦慮している現状が明らかとなった。

では、このような新任保育者の「気になる」子どもとの関わりは、保育者としての熟達の中でどのように変化していくのだろうか。高濱(2000)は、幼稚園の教師が熟達するにともなって、保育上の問題をどのようにとらえ、それをいかに解決するようになるかを検討している。初心者(2-4年)、中堅者(5-10年)、経験者(11年以上)を対象として、子どもの捉え方や指導の仕方などを回答してもらった結果、子どもや指導方法についての知識は、初心者より中堅者と経験者で多く、経験者の知識はより構造化されていることが明らかになった。また、熟達者は指導の難しい幼児に対して、より多様な推論を行ない、幼児の状態を具体的かつ詳細な文脈情報を使って捉えていることも明らかにされている。

このように、保育者は熟達するにつれて、保育上の問題のとらえ方や解決方法が変化してくるといえるが、幼稚園教諭や保育士の熟達化を対象とした研究は少ない。上述した研究からも、熟達保育者は、豊富な構造化された知識をもつようになり、保育上の問題解決においては、文脈的な手がかり、個人差や発達の変化に対する認識、具体的な関わり方の技術などを相互に関連づけたり統合しながら、その時々で様々な予測を行ない、最も効果的だと判断される関わり方を即興的に実践していると想定される。従来、このような熟達化の様相は、適応的熟達化(Hatano & Inagaki, 1984)といった概念などで特徴づけられてきた。しかし、保育の現場では小学校等に比べると構造化された活動が少なく即興的で柔軟な対応が求められるにもかかわらず、この観点からの保育者の熟達化研究はほとんど行われていないのが現状である。

以上のことから本研究では、熟達保育者の「気になる」子どもへの普段の保育の中での関わり方の特徴の詳細を明らかにするために、以下の2つの研究を行なう。

研究1では、非熟達保育者と熟達保育者の「気になる」子どもに対する認識について質問紙による調査を行い、両者の認識の特徴を比較する。具体的には、クラスの中で、熟達保育者と非熟達保育者が「気になる」と感じる子どもが一致するのか、また、子どものどのような特徴を「気になる」と感じるのか、といった点に関して検討を行なう。

研究2では、保育場面の観察とその場面に関する保育者へのインタビューによって、熟達保育者の子どもへの関わり方の特徴を探索的に検討する。特に本研究では、保育場面の観察の中で生じた、「気になる」子どもが含まれるいざこざ場面における熟達保育者の関わりに注目する。堀(1997)による調査では、熟達保育者は非熟達保育者に比べて、架空のいざこざ場面の事例対応についての発話量が多く、様々な視点からの対応を想定していることが示された。また、いざこざ場面においては、幼児の年齢や友人関係など個々の状況に応じて柔軟に対応の仕方を変えていかなければならないことも指摘されている。このようなことから、「気になる」子どものいざこざ場面は、実際の保育場面における適応的熟達化に焦点をあてるという本研究の目的に合致していると判断した。

研究 1

目的

非熟達保育者と熟達保育者を対象とした質問紙調査によって、両者の間で「気になる」子どもに対する認識にどのような違いがあるか検討する。

方法

質問紙調査を実施した。熟達保育者として、A幼稚園の3歳児クラスの担任保育者である60歳代の女性（保育経験年数38年）に調査協力を依頼した。この保育者を選定した理由は以下の通りである。保育経験年数は38年と園内でも最長であり、障害児の保育や各年齢の保育等を経験している。園内でも保育の技術に定評があり、他の園からも保育の観察依頼を受けるなどしている。こういった情報をもとに、この保育者を熟達保育者と判断した。比較対象となる非熟達保育者は第一筆者とした。第一筆者は保育士資格を持つ大学院生であり、2013年度の春から約半年間、幼稚園の保育サポーターとして、熟達保育者が担任をしている3歳児クラスで週に一日の頻度で活動をした。

質問紙の構成は以下の通りであった。(1) フェイスシート：保育者の氏名、年齢、保育経験年数を確認した。(2) 「気になる」子ども選択：日常の保育の中で「気になる」と認識している子どもの個人名を尋ねた。(3) 「気になる」子どもの特徴に関する質問項目：「気になる」子どもの特徴に関する尺度（倉光，2004）を用いた。この尺度は「認知行動発達の進捗」（9項目）「対人関係」（5項目）「注意・衝動の統制」（6項目）の3下位尺度、計20項目から構成されていた。「気になる」と判断した子ども一人ひとりに対して、これらの項目を3件法（あてはまる、あてはまらない、どちらともいえない）で回答してもらった。(4) 「気になる」子どもの特徴の自由記述：選定した「気になる」子どもについて、尺度項目以外で具体的な特徴を自由記述してもらった。非熟達保育者もこれまでの保育サポーターとしての子どもとの関わりをもとにして、同じ質問紙に回答した。

結果と考察

(1) 「気になる」子どもの選択 「気になる」子どもとして、熟達保育者と非熟達保育者が共通で挙げた子どもは4名、非熟達保育者のみが挙げた子どもは1名であった。

(2) 「気になる」子どもの認識 非熟達保育者と熟達保育者が共通して「気になる」子どもとして名前を挙げた4名について、尺度の回答の一

致率を求めた。その結果、それぞれ65%、75%、80%、80%であった。

(3) 「気になる」子どもの特徴の自由記述 非熟達保育者は、子どもができていない事を中心とした抽象的な記述が主であった。それに対して、熟達保育者は、子どものできる事とできない事を具体的かつ明確に記述しており、子どもを理解するための枠組みがより精緻化されている事が示唆された。また、「食事場面」「朝の身辺整理」「遊び場面」といった多様で具体的な文脈と関連づけられながら個々の子どもの特徴が理解されていることも示唆された。また、記述量も熟達保育者が多かった。

研究 2

目的

実際に保育の中で生じた「気になる」子どものいざこざ場面を取り上げて、そこで熟達保育者が行なった関わりや意図や、認識の過程などに関するインタビューを行う。その発話をカテゴリ分類し、定量的、定性的な分析を行うことによって、熟達保育者の「気になる」子どもに対する認識の仕方や支援の特徴を探索的に検討する。

方法

調査協力者 研究1と同じ熟達保育者を対象とした。

手続き 熟達保育者が担任をする3歳児クラスにおいて、第1筆者が保育サポーターとして活動をした。その活動の中で保育の様子を観察し、保育の終了後には熟達保育者に対するインタビューを行なった。保育場面の観察に際しては、ビデオカメラを使用して、保育者の支援場面やいざこざ時の仲介場面等を記録した。インタビューは、(1) 支援の詳細、(2) 「気になる」子どもに対する認識、(3) いざこざ場面における非熟達保育者の関わり方に対する意見、の3つの項目を軸とした半構造化面接を行なった。

調査期間 2014年1月16日から3月17日の2ヶ月間であった。活動の頻度は月曜日から木曜日の週4日であり、一日の保育時間は9時から14時の約5時間であった。

結果と考察

1. カテゴリの生成と発話の全体的特徴

熟達保育者の全12日分（6時間分）のインタビューの発言内容についてカテゴリ分類を行った結果、Table1, 2に示したカテゴリが生成された。カテゴリの生成手順は次の通りであった。インタビューの書き起こしについて、内容のまとめりご

とに分割し、分析の際の1単位とした。例えば、「どうしても、Aさんが今あんな風で飛び出せ飛び出せするから、／そして、言わなくていいことを言ってしまったたり、／あの人の今難しいのがそれを注意するとそれに対してガーッときたりするから、／そこがあの人とんでもなく扱いが難しい人なんでねえとは思うんですけど、／様子次第では今は待つ時、待ってあげてってやんわり言っておけるってそのへんをちょっとなんとかしていかないと。」¹という発言については、「どうしても、Aさんが今あんな風で飛び出せ飛び出せするから、」という部分は、対象となる子どもの特徴について述べており、次の部分が同じ子どもの別の特徴、次の部分が子どもに対する保育者の認識、最後が関わり方の判断を述べている、とったようにして、分析の単位を分割した。

第1, 2, 3筆者の3名で発話の書き起こしを見ながら、分析単位ごとに発言の内容「対象」「内容」「程度」などの基準から分類した。全てのデータを複数回検討し、暫定的な分類カテゴリを生成した段階で、別の評定者に2日分のインタビューの発言内容をそのカテゴリで分類するように依頼した。この評定者と第1筆者との間でのカテゴリ分類の一致率は87%であった。不一致の箇所については、協議の上で分類し、また、必要に応じてカテゴリの表現を修正した。最終的に生成されたカテゴリは<子どもについての発言><保育者自身についての発言><事実についての発言>の3つの大カテゴリから構成された。

まず、<子どもについての発言> (Table1)とは、その日の保育を通じて保育者が感じた子どもに対する認識についての発言を分類するカテゴリである。その下位カテゴリとしては「A. 特定の子どもに対する認識」「B. 子どもに対する認識の過程」というカテゴリが生成された。このカテゴリに関しては、「判断が難しい」「能力(できない)」などの出現頻度が相対的に高く、熟達保育者であっても、「気になる」子どもの保育に対して、絶えず困難を感じながら関わっていることが推察される。しかし、「子どもに対する認識の過程」に含まれる各カテゴリの出現頻度の多さをあわせて解釈するならば、その困難さは、関わり方が全くわからずに右往左往するといった性質の

ものや、「この子はこういう子だからこういう場面ではこうしておけばいい」といったようなルーティン的な判断ではないと考えられる。むしろ、状況に応じながら、個々の子どもの状態を積極的に理解しようとする熟達保育者の態度や認識のあり方を反映したものではないかと推察される。

次に、<保育者自身についての発言> (Table2)は、保育者本人の感情や行動の意図等を含む発言を分類するカテゴリである。その下位カテゴリとして「C. 感情」「D. 判断基準」「E. 保育者の関わり」「F. 反省」が生成された。このカテゴリからは、熟達保育者が実際の保育場面において、その時々に出された子どもの発言を代弁して、もう1人の子どもに伝えるといったように、臨機応変に支援の方法を調整しながら即興的に関わっていることがわかる。また、今後どのような支援を行なっていくかを常に想定しながら関わるといった展望的な認知といった特徴も読み取ることができる。

<事実についての発言>は、保育者が事実を説明しているだけの発言を分類するカテゴリとして生成した。しかし、このカテゴリに関しては、熟達保育者の認識や支援の方法を見出せるものではないと判断して今回の分析対象からは除外した。

2. 熟達保育者の認識の特徴

以下では、個別事例における熟達保育者の発言の内容を分析することによって、子どもの認識の仕方や支援の特徴を詳細に検討する。

(1) 「多様な視点の統合」

上述した<子どもについての発言>から読み取ることができる特徴の1つとして、熟達保育者は多様な視点からの解釈を統合しながら、「気になる」子どもを理解しようとしていた。具体的には、その子どもの過去と現在の統合、多様な場面における行動の統合、子ども自身の視点と保育者の視点の統合、などが見られた。

Table3は、熟達保育者と非熟達保育者が共に「気になる」子どもとして挙げていたA君について、その日の保育を振り返りながら、熟達保育者が自分の認識を語った発言である。熟達保育者は、A君について「言わなくていいことを言ってしまう」(1-2)「調整がとれないっていう所がある」(1-9)などといったような認識を持っており、「扱いが難しい」(1-4)「わからない所はいっぱいある」(1-12)と感じている。

しかし、「運動会の時みたいにお父さんお母さんの前でそのくらいちょっと自制がかかるかな」(1-11)というように、その困難さを安易に一般

¹ 発言の区切りを示す“／”は筆者が挿入した。また、子どもを表すアルファベットは本人の氏名とは関係ない。

Table1. <子どもについての発言>のカテゴリ分類

カテゴリ名	頻度	定義	例
A. 特定の子どもに対する認識		特定の子どもに対する認識を述べている発言	
A-1. 事前の予想		子どもの行動について何らかの予想をしている発言	
(1) できる	7	できるだろうという予想	ごめんなさいが言えるかなと思ったんですよ
(2) できない	3	できないだろうという予想	許すことができないと思いつつ
(3) 判断が難しい	29	予想の困難さ	そこらへんがどうなんかなあと思います
A-2. 子どもの理解		具体的な行動から子どもの理解を述べている発言	
(1) 能力 (できる)	28	能力があるという理解	ちゃんと「うん」ってわかってるって感じがある
(2) 能力 (できない)	42	能力がないという理解	ちょっと間違えてるんだよね
(3) 特徴	25	特徴 (性格, 癖など) の理解	あの子は甘えたい子
(4) 感情	5	感情の理解	自分から逃れられないのが苦しいやろうな
(5) 意図	15	行動の意図や考えの理解	悪態のつき方をそれなりに考えてる
(6) 変化	9	(何かしらの) 変化の理解	今日は朝から調子がなんかあれだった
(7) 成長	8	学びや成長の理解	今日の場面では自分のこうなってほしいという思いは伝わった
(8) 子ども同士の関係性	9	子どもの人間関係の理解	A君とB君はお互いに気にし合っている
(9) 理解の困難さ	41	理解の難しさ	あの人ホントにわからんね
A-3. 目標	26	設定している目標	もうちょっと落ち着いていってほしいな
A-4. 展望的予想	14	子どもの将来的な展望	あんなに毎日騒がなくてもすむよようになるかもしれない
A-5. 総合的理解	4	日々の様子を総合して, 子どもの事を把握しようとする	気持ちは素直な良い子
B. 子どもに対する認識の過程		子どもを理解しようとする際の認識の過程に関する発言	
B-1. 過去との比較	15	子どもの過去と現在を比較する	運動会の時のあの子は…
B-2. 一般的な発達段階	6	一般的な発達段階との対比で理解しようとする	普通そんなことしないですよ ちっちゃい子は特にそう
B-3. 家庭との比較	31	子どもの家庭での様子と比較する	おうちではちゃんと座って食べてるみたいなんです
B-4. 年齢にとらわれない理解	6	子どもの発達を年齢にとらわれないことなく理解しようとする	月齢だけでは言い切れないところがあるんですよ

化するのではなく、過去の別の場面における A 君の様子と関連づけて理解することで、今後の変容の可能性を見いだしている。また、「人が何かにこだわると、あながちもうそんなことって思うけど、本人にとってそんなだけ大変なことなんだね」(I-22)「もしかしたら、私達はそんな風に見えないんだけど、あなたにとってはどれが一番大きいものなのって、探してごらんっていうのをちょっとそれを言って、Aさんが一番大きいって思うものを取らせてあげたらっていうのをちょっとやってみたら良いかもしれん。」(I-17)、といったように一般的な視点や、自分(大人、保

育者)の視点からの理解をしながらも、同時に「その子にとっては、そのような行動をするだけの意味がそこにはあるのだ」というように、A君自身の立場からも行動の意味を解釈することで、子どもの状況に応じた、柔軟な支援の計画がなされている。

高濱(2000)は、熟達保育者は多様な知識を集約したり、関連情報を検索した後に、それらを相互に参照したり統合したりしながら、何を優先させるかといった判断を行っていることを示している。本研究においても同様に、時間、場面、立場を超えた様々な解釈を統合しつつ、子どもの姿を

Table2. <保育者自身についての発言>のカテゴリ分類

カテゴリ名	頻度	定義	例
C. 感情		子どもと関わる際に生じた感情	
C-1. あきらめ	2	呆れやあきらめ	もう、何回も言ったらわかるんだろなあって思った
C-2. 迷い	6	迷い	どっちが良いのかなあと思って
C-3. 困り	3	困り	んー、ちゃんとしてほしいなあと思って
C-4. 驚き	2	驚き	なんでそんなことをするのって思ったんですよ
C-5. 心配・不安	2	心配や不安	大丈夫かなって思いますよね
C-6. 感心	2	感心	すごいなあって思う
C-7. 喜び	2	喜び	あれができたのは嬉しかったです
D. 判断基準		子どもの行動に対する判断基準	
D-1. 危険性の程度	15	怪我をする行動か否かという基準	怪我しないように気をつけていけば大丈夫
E. 保育者の関わり		保育者による子どもへの具体的な関わりや、その意図	
E-1. 行動の意図	1	その行動を起こした理由	あの時は、止めた方が良かったかなと思って止めたんですよ
E-2. 支援の方法		具体的な支援方法	
(1) 代弁	8	子どもの気持ちを代わりに説明	A君は、ごめんなさいって言葉言うのはとてもちょっと勇気がいったけど、ごめんなさいを僕に言えたよなんか似たような事があったなあって、なんとなくほわーっとかもしれないけど感じていけるようにする
(2) 時系列の意識付け	4	時間的な意識付けを行う	私はそれはしちゃいけないことだよねって言ったんですよ
(3) 気持ちを伝える	16	保育者の気持ちを子どもに伝える	
E-3. 支援計画		今後の関わり方を考える	
(1) 気にかける	13	子どもの安全や成長を注意して見守っていくよう気にかける	ちょっと見てあげようね 気をつけようね
(2) 気持ちを伝える	7	保育者の気持ちを子どもに伝える	大丈夫だよってことを言っていかなといけね
E-4. 状況に応じた調整		子どもへの関わり方の調整	これ以上は譲れんよねって思って最初は言わないようにしてたんですよ
(1) 言わないでおく	7	言いたいと思った事を、あえて言わないようにする	そこまで言ったらあの人にはキツいかも
(2) 慌てない・焦らない	16	慌てたり焦ったりせずに、子どもを見守っていく	大丈夫でしょう ちっちゃい場面を溜め込んでも良い
(3) できない	7	状況に応じた気持ちの調整ができない	これ以上は譲れんよねって思って思わずおいて言ってしまう
F. 反省	6	子どもとの関わり方を反省する	もっと早めに言ってあげた方が良かったかもしれないですね

より柔軟に、かつ、正確に捉えようとする熟達保育者の特徴が示唆された。

(2) 広い時間的展望にたった認識

上述した<保育者自身についての発言>からは、熟達保育者は子どもを支援するために、「過去」「現在」「未来」という長期的な時間軸の中での子どもの変容を強く意識しながら関わっているという特徴が示された。

Table4は、ある日の保育において、子ども同士のいざこざに仲介したが解決できなかった、と

いう非熟達保育者の振り返りと、それをうけての熟達保育者の発言である。

この場面において、非熟達保育者は、お互いの気持ちの代弁はしているものの、最終的にお互いが相手とは遊ばない、と行って別れてしまったということで、「スッキリした気持ち」にすることができず、自分のケンカの仲介が失敗したと感じている(2-1)。しかし、このような非熟達者の反省に対する熟達保育者の応答(2-2～2-16)からは、熟達保育者が、解決されなかったいざこざ場

Table3. A 児への関わりについての熟達保育者の認識

id	発話内容
1-1	どうしても、Aさんが今あんな風で飛び出せ飛び出せるから
1-2	そして、言わなくていいことを言ってしまったり、
1-3	あの人の今難しいのがそれを注意するとそれに対してガーッとしたりするから、
1-4	そこがあの人とんでもなく扱いが難しい人なんでねえとは思うんですけど
1-5	様子次第では今は待つ時、待ってあげてってやんわり言ってあげるってそのへんをちょっとなんとかしていかないと。
1-6	今日かなりちゃちゃ入れるような形
1-7	今まであそこまではなかったのに、ただ今日は特に待ち長かった。
1-8	待ちきれなくなって、どんどんきたんだと思うんですよ
1-9	だから、あれだけの力を多少持て余してる所と調整がとれないっていう所があると思うので
1-10	あの、難しいのは難しいんだけどねえ
1-11	運動会の時みたいにお父さんお母さんの前でそのくらいちょっと自制がかかるかな
1-12	どうしてそういう行動が出るんだろうかなってわからない所はいっぱいあるけどね、
1-13	こだわりの強い所とか、A君にしても結果的にはそういう所、彼なりのこだわりの強さがあるって、それが私にはあまり理解ができないし、周りのお友達もシールの大きさを…んー、って思うけどみたいな。
1-14	それは確かにあるね。
1-15	ものすご、細かい。
1-16	するどい、細かいんだろうなってのも思いますよね。
1-17	もしかしたら、私達はそんな風に見えないんだけど、あなたにとってはどれが一番大きいものなのって、探してごらんっていうのをちょっとそれを言って、Aさんが一番大きいって思うものを取らせてあげたらっていうのをちょっとやってみたら良いかもしれん。
1-18	そうすると、あんなに毎日騒がなくてもいけるかもしれない。
1-19	誰かが言う自分もって、それが多少出てきてるんだね。
1-20	あ、そうとう細かいんだねって。
1-21	普通気にしないって範囲のことが気になる、気にするんだろうな
1-22	人が何かにこだわるとやっぱ、あながちもうそんなことって思うけど、本人にとってそんだけやっぱ大変なことなんだねえ
1-23	私はもうある程度わかってあげてそれからまあ毎日そればかりって言っても困ることも出てくるから、その時にたまにはっていうのをちょっと言ってあげるとか
1-24	で、タフになるのを…時間もちょっととってあげるしかないかもしれないと思って。

面も子どもの成長にとって重要な機会であると捉えていることがわかる。具体的には「ちっちゃい場面をいっぱい溜め込んで、良いんじゃないかと思う」、「溜まっていった時点で、耐えられるようになる」といったように、ケンカをしてしまった時の悲しみの感情や、仲直りをして一緒に遊ぶ時の喜びの感情を子どもが経験するために必要な機会だと意味付けている。

つまり、非熟達保育者は、子どもたちのいざこぎについて、現在の1時点に閉じた理解を行なうため、それを「関わり失敗」や「子どもたちにとって価値のない体験」という意味づけを行なう。それに対して熟達保育者は、より広い時間的な展望をもち、いま、ここで起きている出来事を理解しようとするために、このようないざこぎ体験を将来的には子どもの成長につながるものであると意味づけていると考えられる。また、「繋ぎのとこを、ちょっと伝えてあげる」(2-9)という発話から推察できるように、そのような時間的な展望に基づきながら、具体的な子どもへの関わり

方としても、子ども自身が時間軸の中で自分の変化、他者との関係の変化、そしてそれにもとづく感情を実感できるような「繋ぎ」の役割を担うという、具体的な支援の可能性を見いだしていることがわかる。

このような、熟達保育者の時間的展望については、そのスパンの長さも1つの特徴として挙げることができる。インタビューの中で熟達保育者は「3年間で基本なのでそれも慌てないでゆっくり子どもたちの事を見てあげてお互いに皆で関わってあげるっていう姿勢を皆で持ち続けることが大事なんだなあと思います」と語っており、非常に長い時間的展望の中で子どもたちを理解しようとしている事がわかる。

しかし、ただ単に長い時間的展望にたっただけではなく、熟達保育者の場合には、その背後にある子ども一人ひとりの状況に応じた明確な目標を重要視していると考えられる。例えば、「できるだけ自分をコントロールする力って、つかってほしいなってホントに思う」

Table4. A 児と B 児のいざごぎについての非熟達保育者と熟達保育者の認識

発言者	id	発話内容
非熟達保育者	2-1	A 君と B 君の関係というか、ちょっとトラブルになった時に自分がおさめようとして入っていったんですけど、やっぱりどうしても、A 君はこう思ってるよ、B 君はこう思ってるよって言っても、その手が出ることはおさまるんですよ。なんか、気持ちの部分ですっきりしてないのがわかるんですよ。今日朝してたのが、叩き合いみたいになったので、「痛いって言ってるよ」っていう風に言ったんですけどもう、A 君が「B 君と遊ばん」って言って、B 君も「A 君と遊ばん」って言ってそのまま 2 人が別れてしまったんですよ。そこの部分が、やっぱり、なんか、僕的にはやっぱりスッキリした気持ちになってほしいっていうのがあるんですけど、そこがどうしても難しいので、どうしたらいいのかなっていうのが、すごくありますね。
熟達保育者	2-2	うん…。悩むよね。
	2-3	そのスッキリお互いに相手のことすぐわかってあげてほしいけど、でも、まず年齢が低い分ほんとに自分の気持ち、をもう言うだけ。
	2-4	相手の言ってるのを受け入れない。うん、もう受け入れない。
	2-5	そうは言ってる、うんとは言うてるけどでも自分はこうしたいんだ、ってその押し問答にずっとなつてくということがあったりするから、
	2-6	どっちもこうわかってあげられなかったっていうのをちょっと…先生も、寂しいよってそういう風な状態になった 2 人のことをとって寂しいよって。
	2-7	だから、これから、今日は残念お互いにわかってあげられなかったけど、これからまた毎日幼稚園に遊びに来る時に、だんだんお互いの、気持ちがわかってあげられるようになったら良いねえっていう、そのこうなってほしいっていうのをちょっと意識して言ってあげる、うん、そういうことが一つなのかなあって…
	2-8	そして、どこかで、そういうことをちょっと受け入れて、あの、返してあげたりとか、「いいよ」って言葉で言ってあげたら喜ぶと思うよっていったことを受け入れて言ってあげることができたりとか、そういう時に「良かったねえ」って。
	2-9	もうそれで、皆の気持ちが、あ、これが嬉しいことなんやねってお互いにホントに嬉しいことやなつてことがもう一回お互いでわかるような、そういう時を待つっていうか、そこの繋ぎのどこを、ちょっと伝えてあげるしかないかなって思いますね。
	2-10	とても微妙なんだろうと思いますね。
	2-11	だから、大人だってそういうこともありますよね。わかってあげたいって、思うけど、でも許せんのよねって、ね。だからそれと結果的には同じようなことなんじゃないかなあと思う。
	2-12	だから、ホント皆人間。皆人間、こんなちっちゃくても、もう歳がいつとっても、おんなじ部分は、感情面っちゃうか、いっぱいあるんだと思いますね。で、その…内容がちょっと年齢が上がって…行動の、お仕事の話とか他のものが入って、とかそういうことになるだけで、じゃないかなあとは思うよね。
	2-13	そこらへんがいっぱい、そういうこともある、わかってあげられんち思うこともあるけど、でも皆が気持ちよく過ごすためには、今よりちょっと自分が今日はちょっとひいとったほうが良いんじゃないかなあって
	2-14	そのへんがわかるようになる、できるようになるってまでは相当やっぱ時間はかかるし、色んなそういうこう、ちっちゃい場面をいっぱい溜め込んで、良いんじゃないかと思うんですよ。
	2-15	で、そうすると、なんかの時に、あ、なんか同じようなこと、似たような事があったなあっていうのが、こうしっかり思い出せるか、なんとなくぼわーっとかもしれないけど、そういうものが溜まっていった時点で、耐えられるようになるっていうか…じゃないかなあって思うから。

「もっと頑張って自分でちょっとだけ我慢するところとかその力を自分で掴み取る努力はもうちょっとした方がいい」というような発言がしばしばなされていた。非熟達者はしばしば、このような将来を見通した目的意識を明確に持つ事が困難であり、その結果、今、ここで、生じている事が、どのような意味を持つのか、といった価値づけを行なうことも難しくなると考えられる。この

ような、明確な目的意識に基づいた、長期的な時間的展望の中で子どもを理解し、出来事を意味づけ、適切な関わり方を柔軟に判断していくという一連の認識・判断過程が、熟達保育者の特徴として推察される。

総合考察

1. 熟達保育者の特徴

本研究からは、熟達保育者による「気になる」子どもの認識と支援の特徴として2つの点が示唆された。

第1に「気になる」子どもを理解する際に、非常に多様な視点からの解釈を統合しながら、柔軟で、より適切な理解を行なおうとしている点である。その子どもの過去と現在の統合、多様な場面における行動の統合、子ども自身の視点と保育者の視点の統合、などを行ないながら、「かもしれない…」というように、決めつけない理解の仕方をする中で、今後の関わり方の計画や調整がなされていた。

第2に、非常に長い時間的展望の中で、いま、ここで起こっている出来事を意味づけていることである。非熟達者にとっては、しばしば、子どもにとって意味がない、生じるべきではない、と感じるようないざこざであっても、熟達保育者にとっては、今後の子どもたちの成長につながる学びの機会になるかもしれない、といったように、全く異なる意味や価値をもった出来事として理解されていた。また、熟達保育者は、そのような意味づけにもとづいて、時間や時系列を意識して物事を理解する能力が未発達な子どもたちに対して、出来事と出来事の間を「つなぐ」という役割を積極的に担おうとしていた。その時間的展望は、3年間という非常に長いスパンという特徴を持ち、また、その長いスパンでの意味づけを可能にしているのは、明確な目標設定であることが示唆された。

2. 本研究の限界と今後の課題

本研究には、以下の限界や課題があると考えられる。第1に、非熟達保育者の子どもの認識や支援の特徴を十分に捉えていなかったため、結果として、熟達者との詳細な比較が十分にできなかった点である。これは、第一筆者が、非熟達保育者として保育実践に関わると同時に、調査者として熟達保育者にインタビューを行うという調査方法をとったために、非熟達保育者としての記録を残す時間を確保することが困難であったためである。インタビューを行う調査者を別に確保する等、非熟達保育者として保育に関わりながら、同時に必要な記録を残して行く方法を考える必要があるだろう。

第2に、本研究での調査対象は熟達保育者と非熟達保育者が1人ずつであったため、この知見

を安易に一般化することは避けるべきである。今後の研究では、調査対象を増やしたり、中堅保育者という対象を新たに加えるなどして、研究の知見を確認していくことが必要であろう。

引用文献

- Hatano, G., & Inagaki, K. (1984). Two Courses of Expertise. *Research and Clinical Center for Child Development Annual Report*, 6, 27-36.
- 本郷一夫・飯島典子・平川久美子・杉村僚子 (2007). 保育の場における「気になる」子どもの理解と対応に関するコンサルテーションの効果. *LD研究*, 16, 254-264.
- 堀淳世 (1997). 幼稚園教諭が語る指導方法：経験年数による違い. *保育学研究*, 35, 60-67.
- 藤井千愛・小林真 (2010). 保育者による「気になる子ども」の評価：「気になる子ども」と発達障害との関連性. *とやま発達福祉学年報*, 1, 41-48.
- 古市真知子 (2009). 保育者から見た特別な支援が必要な子どもの行動特徴、明らかな知的障害のない子どもについて. *現代教育学部紀要*, 1, 157-164.
- 今中博章・高橋実・伊澤幸洋・中村満紀男. (2013) 保育者の「気になる子」という認識と子どもの行動に関する調査. *福山市立大学教育学部研究紀要*, 1, 7-14.
- 郷間英世・圓尾奈津美・宮地知美・池田友美・郷間安美子 (2008). 幼稚園・保育園における「気になる子」に対する保育上の困難さについての調査研究. *京都教育大学紀要*, 113, 81-89.
- 倉光美保 (2004). 保育者の抱く「気になる子ども」の特徴に関する基礎的研究. *日本保育学会第57回大会*, 発表論文抄録.
- 増田貴人・石坂千雪 (2013). 「気になる子」への保育援助をめぐる保育者の認識や戸惑い. *弘前大学教育学部紀要*, 110, 117-122.
- 無藤隆・神長美津子・柘植雅義・河村久 (2005). 「気になる子」の保育と就学支援：幼児期におけるLD・ADHD・高機能自閉症等の指導. *東洋館出版社*.
- 柴崎正行 (2009). 特別な支援を必要とする乳幼児の保育に関する最近の動向. *保育学研究*, 47, 82-92.
- 高濱裕子 (2000). 保育者の熟達化プロセス：経験年数と事例に対する対応. *発達心理学研究*, 11, 200-211.

